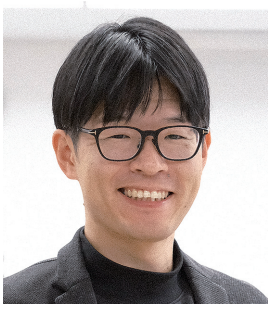
オープニングセミナー 5



前庭機能障害と運動器疾患
―転倒予防に向けた理学療法戦略―

杏林大学保健学部リハビリテーション学科理学療法学専攻

松村　将司

前庭機能障害は耳鼻咽喉科疾患や中枢神経疾患に関連して捉えられることが多いが、運動器領域においても重要な役割を担う。ヒトの姿勢制御は視覚・体性感覚・前庭感覚の統合によって成り立っており、前庭機能の低下はバランス障害を引き起こし、転倒リスクを増大させる。

実際に、股関節骨折患者の約半数が受傷前 1 年以内にめまいを経験していたことが報告されており（Curry, 2023）、前庭機能低下は転倒の高リスク因子である（Zur, 2006）。さらに、前庭機能低下側と股関節や手関節骨折側が一致する傾向が示されており（Kristinsdottir, 2000, 2001）、前庭機能の左右差が転倒方向や受傷部位に関与している可能性が示唆されている。

股関節骨折の約 7 割は転倒によって発生し、その後の身体機能低下や生活の質の低下を招く代表的な要因である。したがって、転倒予防は極めて重要であり、骨折後においても再転倒を防止するための包括的な介入が求められる。

現在、バランス能力向上を目的とした理学療法は広く実施されているが、前庭感覚に着目した介入は十分に普及しているとは言い難い。前庭リハビリテーションでは、視線安定化エクササイズ、馴化エクササイズ、バランス・歩行練習、持久力向上を目的とした歩行などが実施される。特に、前庭動眼反射の機能改善を目的とした頭部運動を伴う視線安定化エクササイズは、前庭入力の再構築において重要な役割を担う。

本講演では、これらのエビデンスを踏まえ、運動器疾患に対する理学療法に前庭機能への介入をどのように応用するかについて解説する。前庭機能という視点を加えることで、転倒予防および機能改善に寄与する臨床戦略の構築を目指す。

略歴

【学歴】
2006 年　東京都立保健科学大学（現　東京都立大学）　卒業
2011 年　首都大学東京大学院（現　東京都立大学大学院）　博士前期課程修了
2015 年　首都大学東京大学院（現　東京都立大学大学院）　博士後期課程修了

【職歴】
2006 年　千川篠田整形外科
2014 年　自由が丘整形外科
2015 年　杏林大学保健学部理学療法学科　助教
2017 年　同　学内講師
2020 年　同　講師
2023 年　杏林大学保健学部リハビリテーション学科理学療法学専攻　講師（現在に至る）

【資格】
博士（理学療法学）
理学療法士
公認心理師
認定理学療法士（徒手）
運動器徒手理学療法認定士（OMPT）
Certified Fascial Manipulation Specialist（CFMS）